

美しさの裏面にある醜さ

『判断力批判』における「醜さの美学」

高木駿(一橋大学/慶應義塾大学)

本発表の目的は、I・カント『判断力批判』(1790)において、美しさを言明する趣味判断との比較により、対象の醜さを言明する趣味判断を説明することである。それにより、美の反対としての醜さを明らかにする。

これまでの哲学的美学において、「醜さ」が主題的に扱われることは、決して多くはなかったとはいえ、例えば、古くは K・ローゼンクランツが『醜さの美学』(1853)、近年では W・メニングハウスが『吐き気』(1999)において、醜さを体系的に考察している。こうした研究では、醜さは、芸術との関わりがなかで、なおかつ、崇高という観点から論じられている。しかしながら、醜いものは、必ずしも崇高なものではない(例えば、雑多に生い茂った道路の雑草は、見てくれの悪い醜いものであるが、崇高とは無縁である)、自然のうちにも醜いものは存在する。そして何よりも、醜いものが崇高なものとして捉えられてしまうと、醜さを美の反対概念として理解することが不可能になってしまう。崇高は、美の反対ではないからである。醜さが、美しさの反対でなくともよければ、そのような研究状況にも頷けるが、われわれの直感がそれを許さない。それゆえ、哲学的美学は、美しさの裏面にある醜さを解明しなければならない。その際に重要になるのが、醜さを、美しさの欠如として論じないという点である。というのも、醜さが美の欠如であるなら、それは、美の対等な反対概念などにはなりえないからである。醜さは、美しさの根拠とは反対の根拠から説明される必要がある。

醜さは、ローゼンクランツが『醜さの美学』を上梓するまで、つまり19世紀中葉にいたるまで、美しさの欠如として、つまりは、積極的な意味を持たず、それ自体の根拠を持たないものとして理解されてきたと言えよう。これは、古代ギリシアから近代に至る伝統にあって、美しさが善さの類縁として、あるいは、善さと連続的なものとして、ときには善さの下位概念として理解されてきたことに起因する。悪が善さの欠如態であったことと同様に、醜さも美しさの欠如態として捉えられてきたのである。こうした醜さの理解は、G・W・ライプニッツ、F・ハチソン、果ては A・G・バウムガルテンの論述においてさえも確認される以上、18世紀に入ってから尚支配的であったと言える。しかしながら、カント美学にあっては、事情が異なる。カントは、『判断力批判』において、趣味能力の働きに注目することにより、美しさの根拠を善さの根拠から区別し、美の独立性を確保した。それゆえ、カント美学には、醜さが美の欠如態として扱われない余地があるのである。それどころか、カントは、或る講義において、「醜さは、美しさと同様に、積極的なものである」(XXIV 708)と述べており、醜さを、美しさと同様に、それ自体で積極的なもの、すなわち、それ固有の積極的な根拠を持つ表象として理解してさえいる。さらに、カントは、別の講義において、「醜さは、美しさの単なる不在ではなく、美しさに反するものの現実存在である」(XXIV 364)と述べており、醜さを美しさの反対概念として捉えている。要するに、カント美学には、趣味論の観点から、美しさの対等な反対概念としての醜さが論じられる可能性が存在するのである。ここでの醜さは、崇高には関わらない。なぜなら、趣味論は崇高とは関係しないからである。しかも、カントの趣味判断の対象は、芸術ではなく自然に限定されるため、カント美学において美しさの反対としての醜さが

論じられることになれば、これまでの哲学的美学とは異なり、見目の悪い醜い自然を美学的に評価することが可能にさえなる。

カントは、『判断力批判』において、醜さおよびそれに関する趣味判断を解明しなかったものの、醜さが美しさの対等な反対として考えられていたことを考慮するなら、自然の美しさを言明する趣味判断との比較から、自然の醜さを言明する判断を類推することは、十分に可能である。実際、近年では、そうした方法によって、醜さに関する趣味判断を解明しようとする試みが展開されてきた。しかしながら、その試みは、いくつかの致命的な問題のために、失敗していると言わざるをえない。主要な問題の一つを見ておこう。カントによると、美に関する趣味判断は、構想力と悟性との「調和」という心的状態から生みだされる快の感情によって規定される。そうであるなら、醜さに関する趣味判断は、諸能力の「不調和」から生みだされる不快の感情によって規定されることになる。ところで、「調和」は、快の根拠であると同時に、認識や判断一般を成立させる条件とも言われるので、「調和」を欠く「不調和」によっては、認識や判断が不可能になってしまう。それゆえ、「不調和」は、醜さの言明のためにあるにもかかわらず、醜さに関する趣味「判断」を不可能にさせてしまうという自己矛盾に陥るのである。

本発表は、既存の先行研究と同様に、美に関する趣味判断との類比から、醜さに関する趣味判断の説明を試みるが、その際には、「不調和」に関わる問題を含め、これまでの試みに指摘されてきた主要な問題を解決可能とする解釈を呈示しなければならない。そのために、まず、第1節では、既存の先行研究とそれに対する諸批判を概観することで、醜さに関する趣味判断を論じる際に解決しなければならない問題を抽出する。次に、第2節では、そうした問題を踏まえた仕方で、美に関する趣味判断、より正確に言えば、それを規定する快の感情の根拠、つまり認識諸能力の「調和」との比較に基づいて、「不調和」の新たな解釈を展開する。最後に、第3節では、「不調和」から醜さに関する不快の感情が生みだされる仕方を明らかにし、その不快に基づく判断を、自然の醜さを言明する趣味判断として説明する。これにより、美しさの対等な反対概念としての醜さを詳らかにするとともに、その対象が芸術ではなく自然にあることを示す。